

研究推進校事業報告書

〈取組と成果のポイント〉

道徳教育に造詣の深い外部講師を招いて、教科横断的な授業計画づくりや道徳の授業づくりの研修を行った。児童の実態に合わせた授業づくりを進めていくために、学習や行事等の振り返り、生活日記の内容から児童の変容を捉えた。また、大学教授を講師とした講演会を開催し、道徳教育について地域の方や保護者が共に考える場を設定した。親子道徳の授業や家庭での話し合い、子供と地域の方との会議を通して、道徳について地域で考えることができるようにした。

さらに、地域学校協働活動を活性化させ、道徳の時間と他領域を関連させた教育活動を行った。道徳教育の充実を図るとともに、総合的な学習の時間や様々な取り組みを通して、子供たちが地域を好きで、地域に主体的に関わることのできる実践意欲と態度を育むことができた。

1 研究推進校の概要

学校名	所在地	電話番号	児童数	備考
蒲郡市立 竹島小学校	愛知県蒲郡市府相町 三丁目40番地	0533(69)7171	320人	

2 研究課題

(1) よりよい生き方を実践する力を育む道徳教育の取組

① 児童が自分の在り方についての考えを深め、よりよく生きようという心情や態度を養うための「特別の教科 道徳」の授業改善

② 外部講師招へいによる「特別の教科 道徳」の授業改善と評価の研修

(2) 地域の特色を生かした道徳教育の取組

① 地域や家庭とともに考える道徳教育の推進（道徳の会の計画、道徳教育における家庭や地域の重要性について考える場の設定）

② 家庭・地域とともに取り組むためのカリキュラムマネジメント

3 研究主題とその設定理由

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実
—家庭・地域との連携を生かした道徳教育の推進—

研究主題をふまえ、今年度の目標と目指す子供像を、以下のとおり定めた。

「次代の地域社会を創る主体的で創造あふれる児童を育てる」

- ① 「自分づくり」 生き生き伸び伸びと活動し楽しく学ぶ子（学び合い）
- ② 「友だちづくり」 尊重と思いやりをもって、仲よくする子（友だちとのつながり）
- ③ 「地域づくり」 地域とかかわり、心も体も元気な子（豊かさ）

上記の目標及び目指す子供像を達成するために、道徳教育に造詣の深い外部講師を招いて、教科横断的な授業計画づくりや道徳の授業づくりの研修を行う。教科横断的な授業計画づくりや道徳の授業づくりの研修について、その研修記録をまとめるとともに、中学校区で情報を共有していく。実態に合わせた授業づくりを進めていくために、学習や行事等の振り返り、生活日記の内容から児童の変容を捉えるようにする。

また、道徳教育に造詣の深い大学教授を講師として招いた講演会を企画し、道徳教育について地域の方や保護者が共に考える場を設定する。さらに、「親子道徳」や「子ども議会」を通して、学校の道徳教育への取組について地域で考えることができるようにする。そして、学級通信やホーム

ページ等で、道徳の授業研究の内容を発信し、保護者、地域の方からの感想の内容を検証しながら、家庭や地域との共通理解を図り、家庭や地域の道徳性を高めたい。

4 研究の概要及び特色

(1) 研究の概要とねらい

令和5年度の全国学力・学習状況調査の質問紙の結果によると、「いじめはいけないことだと思う」「人の役に立つ人間になりたい」などの質問に対して95%以上の児童が「当てはまる」と回答しており、本校の児童は、道徳的な意識が高いことが分かった。また、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は58.6%にとどまるものの、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は、82.8%であった。地域の一員として行動したいという思いをもっているものの、実際に行動することに至っていない児童がいることがうかがえた。

そこで、自分たちの住む町の課題を捉え、3年生は「福祉」4年生は「SDGs」5年生は「公共の場」6年生は「防災」や「学校と地域との関わり」などをテーマに総合的な学習の時間を中心にして、自分たちにできることを考える実践を行った。子供たちは、校区の環境を良くしたい、住みやすい町にしたいという願いをもち、教師や学級や学年の仲間とともに地域のためにできることを考えて実行できた。けれども、自分一人でも動き出す、働きかけようという姿には達しなかった。低学年においても、同様な傾向が見られると考えられる。本校の児童には、「みんなと同じように～したい」「みんなが～だから…」「みんなと一緒に～しよう」と、周囲の動きや考えに左右される傾向があり、自ら進んで行動する力、新しいことに挑戦する力などに課題があると考えられる。

このような現状から、今後も、地域学校協働活動をより活性化させるとともに、道徳の時間と他領域を関連させながら、社会に目を向けた教育活動を行う。道徳の時間を大切にしながら子供たちの心を揺さぶり、自分たちの住む地域を自分たちで守り、よりよくしていくために動き出そうとする姿を目指す。そして、地域が好きで、地域に主体的に関わることでできる実践意欲と態度を育んでいくための道徳教育の充実を図ることを本研究のねらいとする。

(2) 検証方法(目標達成状況等把握のための方法)及び成果の普及

- ① 外部講師を招いて行う、教科横断的な授業計画づくりや道徳の授業づくりの研修について、その研修記録をまとめ、中学校区で情報を共有する。
- ② 学級通信やホームページ等で、道徳の授業研究の内容を発信する。
- ③ 学習や行事等の振り返り、生活日記の内容から児童の変容を捉える。
- ④ 保護者、地域の方からの感想の内容を検証する。
- ⑤ 県教育委員会作成の意識調査(6月・1月)を行い、研修の成果を検証する。

(3) 校内研修

本校では、令和4年度より蒲郡中学校区でコミュニティスクールとなり、9か年を通して「次代の地域社会を創る主体的で創造力あふれる児童・生徒」を育てることを目標としている。その中で、総合的な学習の時間や生活科で子供たちが主体的に考動(考え動く)できるように単元構想や授業づくりを工夫している。子供たちは、地域のために行動したいという思いをもっているものの、自分で考えてすすんで動くことを苦手としている様子であった。そこで、道徳の授業を通して、子供たちの心を揺さぶることで、自ら地域の一員として動き出す子を育みたいと考えた。そのために、授業力を向上させたいと願う教員の思いは切実で、今回の研修は大いに役に立つものであった。

① 第6学年道徳科授業研究会と講話

名古屋学芸大学特任教授石川雅春先生を講師に迎え、6年生の「生命の尊さ」の道徳研究授業協議会后、以下のようなことを御指導いただき、さらなるレベルアップを目指すための学びとなった。

- ・3分程度の導入で、「価値への方向づけ」「教材への動機づけ」ができていてよい。
- ・道徳的価値が高まった意見を黒板の上部にく配置の板書は、いろいろな場面で使え、効果的。



6年「恋ちゃん—はじめての「みとり」」板書

- ・ペアトークは1分45秒程度で行う。
(児童の実態によるが、トークが静かになるタイミングを考えて行う)
- ・授業の終末の余韻をもった終わりがよい。
- ・子供たちが語る中で、未来が見えてくる。
- ・シーンとして考えさせる場が欲しい。考えたことのないことを考えさせたい。
ex) 「どうして遺品を集めるの？」
- ・道徳は生徒指導ではない。けれども、今は実効性のある道徳が求められている。

②第2学年道徳科授業研究会と講話

岐阜聖徳学園大学教授山田貞二先生を講師に迎え、2年生の「自然愛護」の道徳研究授業協議会后、道徳の授業づくりとして、以下のようなポイントを教えていただいた。

- ・学習指導要領解説をまず読もう。教材研究として「道徳性曲線」を書いてみる。
- ・決まりきったパターンは×。教師の「これを出させたい」をやめる。教師も一緒に考える。
- ・他者理解、人間理解（自分の弱さ）価値理解。他者理解ばかり追うと「きれいごと」。
- ・振り返りは5つのポイント。

(もやもや、誰かの意見でかわった、考えた、弱さ、これから生かしたいこと)

- ・多面的（いろいろな見方）と多角的（立場や角度）に考えることができるようにする。
本時の場合は、まるちゃんの立場からもっと考えさせるようにする。
- ・ICTを活用しよう。スクイメニュー「ポジショニング」「心の数直線」を使う。
- ・中心発問で広げる → 深化発問で深める（5～8つ）。
- ・役割演技は、「座って」「インタビュー式で」「演者は教師が指名して」「板書なしで“つなぐ”」を意識するとよい。



蒲郡中学校区道徳研修会（グループ協議）

③蒲郡中学校区「道徳研修会」

夏休みに本校教職員と中学校区の他校の先生方とともに、山田貞二先生を講師にお招きした道徳研修会を実施した。教材分析の方法や発問の方法、更に効果的な「親子道徳」の在り方を教えていただいた。

- ・教材研究では、まず学習指導要領の解説を読む。
- ・教材研究をしっかりと行うことで発問が決まってくる。

- ・ 道徳性曲線は効果的。
- ・ 早めに自我関与を入れることが大切。（国語との違い）
- ・ 発問は、共感的、分析的、投影的、批判的なものがある。
- ・ 人間理解ができるような授業案を考えることが必要。

（４）家庭・地域との連携

①子供たちの取組

ア 登校ゴミ拾い活動

昨年度、地域のゴミ問題にも気づき、学年のみんなで地域清掃を行った6年生の子供たち。今年度、自分たちの活動を更に広げようと、ゴミ問題を全校に伝え、竹島小学校の子供たち全員で、登校時に「通学路のゴミ拾い活動」を行うことができた。駐車場や畑、道路の植え込みに落ちているゴミを子供たちはどんどん拾った。子供たちが主体となって動き出した姿である。体験活動を通して、子供たちは地域の一員としての自覚が芽生えた。

中心となって活動を進めた清美委員長の振り返りには、「個人でも地域のゴミをひろったりしたい」とあり、公共の場を大切にしていこうという思いが高まっていることが分かる。けれども、「こんなに地域にはゴミがあるんだ（中略）ゴミをすてる人がたくさんいるんだな」という記述もあった。今後、自分たちの住む地域に愛着をもち、地域の一員としての誇りをもって過ごすことができるよう、「郷土を愛する心」を育むことができるような取組を道徳科と関連させながら進めていくことが必要であると感じた。

イ 地域とともに考える「子ども会議」

竹島小学校は隣接する府相公民館に出入りする地域の方々と関わる機会がしばしばある。読み聞かせをしていただいたり、校庭の「ハッピー畑」で一緒に野菜を育てたり、図工や家庭科の制作を手伝っていただいたりしている。ただ、子供たちにとって受け身的な活動がほとんどで、地域の方の名前を覚えて仲よくなったり、地域の方のために自分たちが働きかけたりすることはなかった。

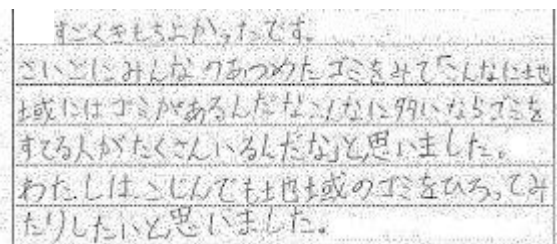
今年度は「交流委員会」を立ち上げ、子供たちが中心となり、地域ボランティアの方と話し合いながら、地域の方とともに活動できる取組を計画した。隣接する公民館との共同スペースを利用して定期的に開催する委員会では、地域の方に質問し、地域の方の意見を取り入れながら話し合いが進んだ。子供たちからは、「ボランティアの人と仲良くなれるように一緒に歌を歌おう」という意見があがり「歌声集会」を開催することができた。また、昨年度までは、教師と地域ボランティアの方が計画する「昔遊びで遊ぼうデー」に参加するだけだった子供たちが、自分たちの手で、遊びの会を計画したいと、地域の方に投げかけ、

「地域の人となかよく遊ぼうの会」を開催することができた。公民館や体育館、特別教室で昼休みの時間に地域の方と将棋やオセロをしたり、めんこやコマ回しをしたりして、楽しむ姿が見られた。

ウ 中学校区で考える「子どもサミット」



登校ゴミ拾い活動



子供の振り返り



地域の方との話し合い（交流委員会）



地域の方と将棋をさす子

本校を含む蒲郡中学校区内の3小学校と1中学校は、連携して教育活動に取り組んでいる。

夏休みには「蒲郡中学校区子どもサミット」を開き、各校の生徒会、児童会役員の子供たちが集まり、地域の問題点や改善点を話し合うこととなった。代表として参加した子供たちは、竹島小はたくさんの方にお世話になっているにもかかわらず、その方々の名前や顔をしっかりと覚えてはおらず、災害時などに助け合って行動することができるかということに問題意識をもっていった。この会では、自分たちの思いを進んで伝えることができ、地域の人ともっと仲よくなるためにできることをともに考えた。熟議の結果、まずは地域の方との挨拶を推進するために蒲郡中学校区で「あいさつ運動」を実施すること、地域の方から「あいさつ協力隊」を募集し、その方たちをニックネームや名前呼び、仲よくなることをねらった。



子どもサミット



蒲郡中学校区あいさつ運動

② 地域・保護者への啓発活動

ア 保護者や地域の方を対象にした「道徳講演会」と

「親子道徳の授業」

保護者や地域の方と共通理解のもとに子供たちの心を育むことで、子供たちのいじめやネットトラブルを未然に防いだり、規則の尊重に目を向けたりすることができる。また、子供たちが保護者の価値観に触れることで、より道徳性が高められると考えた。そこで、9月末に保護者や地域に向けて道徳の授業を公開した。



6年生親子道徳

授業の前に岐阜聖徳学園大学の山田貞二先生による「道徳講演会」を開催し、その日の授業のねらいや授業の工夫を伝えていただいた。保護者の中にはメモを取り、うなずきながら話を聞いている方もいた。

授業後保護者からは、「学校や集団の中でも子供たちが心の土台を育める授業を受けられること、親もその内容を知ることができることに感動しています」「多様性が求められる社会で、道徳は5教科よりも大切」などの意見をいただいた。講演会が、保護者や地域の方に道徳教育への理解と協力をいただき、共に子供たちの心を育むためのきっかけとなったのではないかと感じた。一方で、「道徳やモラルの概念は自然とつくり上げられると思います」「道徳は大切だと思いますが、親子で話し合えるような工夫がもっとほしい」「内容が年齢不相応に感じました」のように、授業の内容に満足していない意見もあった。今後も啓発活動やさらなる授業の工夫、子供の実態に即した教材選びが必要であると感じている。



4年生学級通信

イ 道徳通信

道徳の授業についての学級通信を発行したり、授業の板書の写真やワークシートを持ち帰ったりして、家庭で道徳について話題にするきっかけとした。この取組は、保護者に道徳教育に関心をもつていただくことにつながっただけでなく、授業を行う担任の意識も高まったように感じる。一つ一つの教材分析を念入りに行い、子供たちの心を揺さぶることができるような授業をめざそうという教師の努力につながった。

ウ 教室環境

道徳の授業で考えたことを日常生活や行事、学習につなげ、子供たちの道徳的実践力がより高まることを願った。そこで、授業で行ったことなどを子供たちの目にふれるところに掲示し、関連する学習や行事の前後で思い返すことができるようにした。さらに、目当て達成のはなまるマークや友達や異学年の仲間からのお礼の手紙などを掲示し、活動を自覚化することで子供たちの行動や思いを価値づけることができるようにした。



1年生から6年生へのメッセージ

エ 親子ハート週間

家庭で道徳の教材について話し合う時間を設けた。学校で行った資料をもとに、家庭で話をしたり、振り返りを保護者に読んでいただいたりすることや、道徳の資料をおうちの人と一緒に読み、感想を交流したりすることを通して、家庭と連携しながら子供たちの道徳的心情や判断力、実践意欲と態度を養うことをねらった。

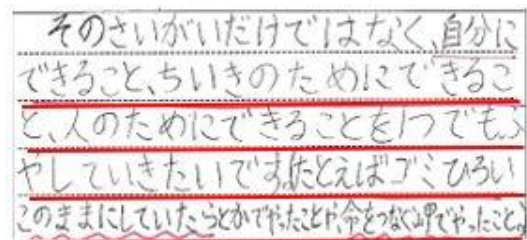
多くの家庭が協力的であった。けれども、わずかではあるが、家庭でゆっくりと話をする時間をもつことのできない子もいた。兄弟一緒に取り組めるような資料を用意したりしながら、親子ハート週間の取組を行うようにしたが、十分な話し合いには至っていないようだった。子供たちの家庭環境は様々であるが、地域の一員として道徳的心情等がより高まるように、全ての子供たちの心を育てていきたい。そのために、地域ボランティアとの活動を増やしたり、教師が個別に声をかけたりする必要性を感じている。

(5) 授業実践

①竹島の海や生き物にふれ、海を守るために動き出す子（4年実践）

ア 豊かな竹島の海を未来へつなぐ！

学区にあり、蒲郡のシンボルともなっている竹島は、子供たちにとっても身近なものである。しかし、子供たちは、竹島の海の生き物に実際に触れた経験は少なかった。そこで、身近にある「竹島の海」を教材として取り上げた。実際に海や生き物に触れながら、竹島の海の実態を調べる活動の中で、竹島の海に関わる人たちに直接インタビューする場を設け、竹島の海を守るために、多くの人が関わっていることに気づかせていきたいと考えた。自分たちの生活が海やそこに住む生き物たちに大きく影響を与えていることに気づけるようにすることで、竹島の海や生き物を守るため



「竹島の海」実践の振り返り

に、自分たちにできることをしていきたいという思いを育み、竹島の海のために自分にできることを考え、動き始める姿を期待した。

イ 道徳 C 勤労、公共の精神

資料「神戸のふっこうは、ぼくらの手で」をもとにして、みんなのために働くことについて考えた。大便を手で片付ける先生の姿を見た主人公の気持ちについて考えた際には、「片付けてくれて、ありがとうという気持ち」など、他人（ひと）事のようにとらえている意見が多くみられた。そこで、「自分が実際にその場にいたら協力できるか」と教師の出によって揺さぶったことで、「汚いやだ」「自分ならできないかも」と本音を引き出すことができた。さらに、他者の視点に立って考えられるように、「先生はどんな気持ちで大便を片付けているのだろうか？」と問いかけた。すると、「このままでは、みんなが困ってしまうから」「みんなのためにという気持ちでやっている」という意見があがり、大便を片付ける先生は、「みんなのために」という思いから行動しているということに子供たちは気づいていった。その後も、主人公の気持ちの変化を場面ごとに細かく追っていくことで、「誰かのために働くことで、その誰かが喜んでくれるから、自分もうれしくなる」とみんなのために働くことよさについて考えることができた。

② 仲間とともに、生き物への愛着を深め、優しい心で接する子（2年実践）

ア 生きものとなかよくなろう

～みんなにこにこな水ぞくかんをつくりたいな～

学区にある西田川は子供たちにとって身近な川である。しかし、子供たちが川の生き物に実際に触れた経験は少ない。そこで、身近にある「西田川」を教材として取り上げ、自分たちで川の生き物を捕まえて育てる活動を取り入れた。子供たちに生き物に合った世話の仕方があることに気づかせ、生き物への愛着を育みたいと考えた。自分の育ててきた生き物たちを発表する場として「にこにこ水族館」を開いた後、「大事に育ててきた生き物を川に返すのか、育て続けるのか」を考える場を設けたところ、子供たちは、生き物に命があることに気づき、これからも大切にしていきたいという思いをもつことができた。

イ 道徳 D 自然愛護

資料「ダンゴムシのまるちゃん」を用いて、生き物の気持ちを考えることについて話し合った。主人公の「わたし」が自分本位な世話をする場面と、ダンゴムシの気持ちを考えて適切な世話をする場面を取り上げた。「人間とダンゴムシは全然違うから、「わたし」の思うとおりに世話するとまるちゃんはいやだと思う」という発言を受けて、子供たちは生き物の気持ちを考える大切さに気づいていった。そこで、子供たちが、自分の今までの世話の仕方を振り返る時間を設けた。この振り返りは、子供たちが、飼育方法を改善しようとするきっかけになったと考える。



生き物の世話の振り返り

③ 地震の被害から自他の命を守るため、自ら動き出そうとする子（6年実践）

ア 竹島防災リーダーへの道～地域とともに考える、防災対策～

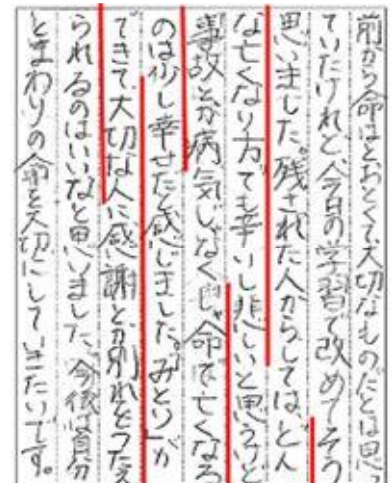
本校の6年生の子供たちは、災害の恐ろしさをニュース等で知っていても、自分の身に降りかかるかもしれない事態に備えて、危機感をもち、自分事として防災について考えている児童はほとんどいなかった。そこで、能登半島地震について調べたり、体験者の話を聞いたりする場を設定したところ、子供たちは、南海トラフ地震について備えたいという思いをもった。

その後、子供たちは命を守るために、各家庭で必要な備えや適切な行動についてまとめた「防災マニュアル」を作成し、全校に伝えた。また、共助の重要性を感じたことから、地域の人と一緒に防災対策について考えた。地域の人たちと話し合い、地震の前と後にできることや、できそうなことを見つけていった。子供たちの振り返りには、「地震が来るとパニックになると言っていた。地

域の人に呼びかけをしたり体育館に誘導したりしたい」とあり、実際に地域の人と話したことで、相手の思いに気づき、自分にできそうなことを考え始めたことが分かった。

イ 道徳 D生命の尊さ

この学習に合わせて、「かけがえのない命」（恋ちゃん—はじめての「みとり」）を扱い、命について考える場をもち、自他の命を大切にしたいという思いを高め、災害への備えに目を向けさせることにした。みとりを経験した恋ちゃんが、前向きな気持ちになれた理由に迫るために、恋ちゃんの写真の写真を提示し、「どうして笑顔になれたのか」と発問した。中には、曾祖母を亡くした実体験から「お父さんが、『天国で応援してくれているよ』と言ってくれたから笑顔になれた」と発言した子がいた。



6年生「道徳」の振り返り

更に「悲しみから立ち直れない死はあるか」と切り返すと、事故死という意見が出た。この意見を取り上げ、「今回の死とどう違うのか」と投げかけた。すると、「事故は立ち会えないし相手を恨む」「寿命なら仕方がないと思える」など、予期せぬ死が、残された人にとっていかに辛いものであるかに気づいた。命の尊さについての認識を深め、自他の命を大切に思いながら生きていきたいという思いを高めたことが分かった。

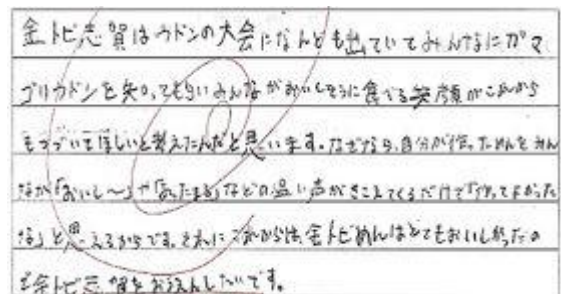


地域の方との防災会議

④ 地域を知り、地域の魅力を広げようとする子（5年実践）

ア 蒲郡もり上げプロジェクト 自慢の「金トビ志賀」を伝え隊

子供たちは昨年度、「蒲郡クラシックホテル」を教材として、自分たちの住む地域に自慢できるものがあることを知った。そして、地域の特産品「ガマゴリうどん」に興味をもった。けれども、学区の「金トビ志賀」のめんがガマゴリうどんに使用されていることや「金トビ志賀」の地域を盛り上げるための取り組みを知らない。そこで「金トビ志賀」とかかわり、金トビ志賀で働く方の思いに気づけるようにすることにした。



「金トビ志賀」との交流後の振り返り

道徳の時間（下記）に、伝統と文化を守ることにについて考えた後、「金トビは、どのように100年も伝統を受け継いできたのだろう」「どんな思いで100年も続けてきたのだろう」と、伝統を受け継ぐ意義やその思いに関心をもちながら、「金トビ志賀」の魅力を探る姿が見られた。

子供たちは、金トビ志賀の志賀さんからめんゆで方のコツを教えてもらったり、めんを作るためにたくさんの苦勞を乗り越え、努力をしてきた話を聞いたりした。そして、「めんだけじゃなくて働く職人さんたちも魅力だね」「近くに金トビ志賀があるってうれしい」という感想をもった。

振り返りには、「みんなにガマゴリうどんを知ってもらいみんながおいしそうに食べる笑顔がこれからもつづいてほしいと考えたんだ」とあった。志賀さんとの交流の中で、めんづくりだけではなく、地域に貢献している「金トビ志賀」の新たな魅力に気づいたことが分かる。また「金トビ志賀を応援したい」とあり、金トビ志賀のためにこれから何か行動したいという思いが膨らんできていることが分かる。

イ 道徳 C伝統と文化を守るために

道徳科では、資料「曲げわっぱから伝わるもの」を取り上げ、職人の見えない努力や苦勞があっ

て、伝統文化が育まれること、まだ知らない地域の魅力があることに気づかせていくことにした。伝統工芸品である『曲げわっぱ』について、どう思うかを聞くと、「ごはんがおいしくなる」といった肯定的な意見と「かわいくない」「地味」といった否定的な意見が出た。そこで主人公の気持ちに共感できるかと投げかけたところ、子供たちから、「自分の好みの方がいい」「最新の物の方が便利」という本音を引き出すことができた。そして、「こういった伝統や文化はなくなってもいいのかな」と問いかけると、「歴史がある、とだえさせてはいけない」「職人もかなしい」という意見があり、伝統や文化を継承する大切さについての発言が続いた。振り返りでは「みんなが伝統や文化を守っていかないといけないから、祭りに出るなどみんなのできることをやっていきたい」とあり、地域の一員であり、自分自身も伝統や文化を受け継ぎ、大切にしようとする思いが芽生えてきたことがわかった。

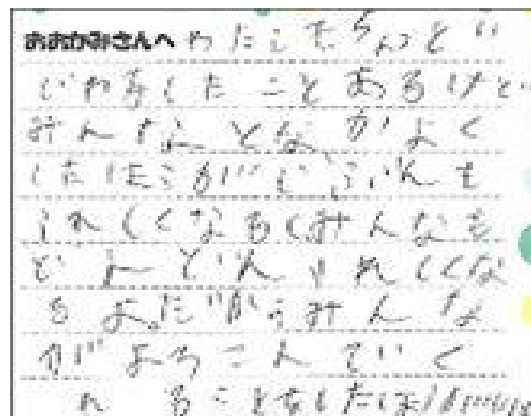
⑤ 秋のものに愛着をもち、友達とのかかわり合いを楽しみながら目標に向かって動き出す子

(1年実践)

ア つくろう！ぼく・わたしのひみつきち

自分の力で様々なことができるようになってきた1年生の子供たち。秋見つけを行い、どんぐりや落ち葉を拾い、秋のものを使って何か作れないかと考え、秋のもので「ひみつきち」を作ることになった。ひみつきち作りに向けた「ひみつきち会議」で困ったことの解決方法を考えた。葉っぱのカーテンがすぐに風で飛んでしまうことに困っていた児童は、友達「網をやめてビニールにテープで葉っぱを貼るといいんじゃないかな」と提案を受け、畑で使うマルチにテープで葉っぱを取り付けることにした。振り返りには、「こまったりなやんだりしたけど、グループのみんながたすけてくれて、いいひみつきちができた」と書かれていた。友達と協力しながらよりよい方法を見つけ、取り組むことができたのではないかと考える。

十分に遊びきった子供たちは6年生や地域の方を招待して遊ぶ『ひみつきちで遊ぼうの会』を開くことにした。どうしたら6年生や地域の方が楽しんでくれるのかを考えながら、6年生や地域の方と一緒に楽しく遊ぶことができた。子供たちは、「自分たちのひみつきちに招待することができて、ひみつきちをがんばって作ってよかった」と振り返った。6年生や地域の方と交流したことで、ひみつきちを作った達成感を味わい、前向きにひみつきちを作ってきた自分自身のがんばりにも気づくことができた。



1年生（道徳）の振り返り

イ 道徳 B親切・思いやり

ここで、道徳「しんせつにすると」（はしのうえのおおかみ）をもとに、秋見つけや、ひみつきち作りで、友達と協力したいという思いを高め、仲間への意識を高めていくことをねらった。

おおかみが最初と最後に言った「えへん、へん」というセリフの後に続く言葉は何になるのかペープサートを使い、おおかみになりきって考えた。どちらの場面でも「いい気持ちになる」という意見から、「二つのいい気持ちにはどんな違いがあるの？」と問いかけ、おおかみの気持ちの変化に気づかせた。「最初は、自分が楽しくなるためのいい気持ちで、最後のはみんながやさしくなるためのいい気持ち」と発言する子がいた。子供たちは、自分のことよりも、相手や周りのことを考えて行動したときに得られる喜びに気づいていった。おおかみに手紙を書く形の振り返りでは、「私もちょっといじわるしたことある」と書き、自分の弱さに素直に向き合うことができた子もいた。「なかよくした方が、じぶんもうれしくなるし、みんなもどんどんうれしくなる」と、友達と心地よく過ごすためには互いに相手を思いやり、やさしい気持ちで接することが大切であると気づいた。

⑥蒲郡を安心して住める町にするために動き出す子（3年実践）

ア やさしさいっぱい わたしたちの蒲郡（まち）

子供たちは、社会科の町探検を通して蒲郡市の特徴や特色について学び、地元への関心を高めた。また、学級の係活動に積極的に取り組み、みんなのために働きたい、役に立ちたいという思いをもっていた。そして、活動範囲が広がり、様々な人との関わりが増え、相手の気持ちを考えることができつつあった。

道徳の授業（下記）をきっかけとして、子供たちは、町の中の工夫を調べ始めた。校内や公民館の“優しい工夫”に注目し、駐車場の広さの違いやスロープがどれだけあるのかなどを探る姿があった。点字ブロックに注目した児童は、「目の見えない人のために町全体に点字ブロックを置いたらいいのではないか」と考えた。しかし、市民病院を見学し、点字ブロックは視覚障がいのある方にとってはよいが、車いすにとっては動きづらいものであることに気づいた。みんなが安心して住むためには人の助けが必要だと考え、「自分も声をかけて助けたい」という思いをもつことができた。

子供たちは、「お年寄りの方に元気に挨拶することはできる」「お年寄りの方の荷物を持つことができる」と、お年寄りを意識していた。そこで、地域のデイサービス「竹島園」でお年寄りの方と交流する場を設けた。子供たちは、「持ちやすいように（かるたを）大きく作ろう」と、お年寄りの方のためにできることを考え活動した。自然と相手のこと思って動く姿があった。総合的な学習の時間と道徳を関連付けて単元を構想したことが、相手のことをもっと知ろうという思いや誰かのために行動していこうとする思いをもつことにつながった。

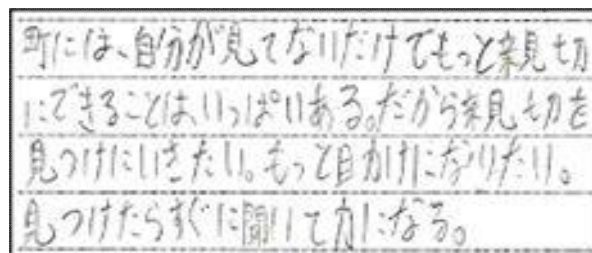
イ 道徳 B親切 思いやり

資料「こまっている人がいたら」（親切がいっぱい）をもとに親切について考え、町には体の不自由な方など様々な人がいることに気づき、福祉へ興味をもてるようにした。ハンカチを落とした場面とお年寄りの荷物を持ってあげる場面を取り上げ、自分だったらどうするか考えた。「ハンカチなら拾ったことがあるからできる」という意見が多かった。そこで、「町の中だったらできるか」と教師が問い返すと、「知らない人



お年寄りと手遊びを楽しむ子

だったら無理かもしれない」と児童から本音を引き出すことができた。そして、親切にしたがわとされたがわのそれぞれの思いに目が向けられるよう役割演技を取り入れた。演技を行った児童に気持ちを問うことで、子供たちは「うれしい」という気持ちが共通していることなどに気づいた。



3年生（道徳）の振り返り

町には自分が気づけていない親切がたくさんあ

ることに気づき、「もっと助けになりたい、（困っている人を）見つけたらすぐに聞いて力になる」

「何をしてほしいか聞くといい」などの声があがり、この授業が今の自分にも何かできることがあるのではないかと考えるきっかけとなったようだった。

5 研究の評価

（1）研究の成果

地域学校協働活動の取組として、児童会活動や委員会活動を中心に積極的に地域とのかかわりを設けたことで、日常生活の中で地域の人が子供たちにとって当たり前存在となってきた。

また、中学校区合同で「あいさつ運動」を実施したことで、小・中・地域のつながりがより深まった。

さらに、道徳教育の充実に向けて、様々な教員研修や地域で道徳教育について考える場を設けたことで、子どもたちがよりよく生きるための基盤となる道徳性を養うための取組が充実した。

総合的な学習の時間や生活科の単元との関連を考えて、適切なタイミングで道徳の授業を取り入れたことで、道徳で話し合った内容や価値観が他教科での話し合いの土台となっていく。道徳科の授業では、話し合いに力を入れたことで、「弱音を言ってもよいのだ」という空気感が子供たちの中にも浸透し、自分の思いを進んで出し合う、活発な意見交流となった。そして、役割演技や心の数直線など研修で教わったことを授業の中で活用したことにより、子供たちは、本音を出して真剣に考えたり、他者目線で多角的に物事を見ることができるようになったりした。

子供たちに行った道徳的判断力や地域の一員として動き出しているかなどを尋ねる道徳実態調査では、6月と1月で大きな変化はなかった。しかし、子供たちのつぶやきや様子から、地域への愛着をもっている子が増えてきているのではないかと感じ取ることができる。教員に行った道徳意識調査からは、道徳の授業づくりに対する意識や、地域と連携した道徳教育への取組状況などが大きく向上していることが分かった。

今後も子供たちの心を耕し続けることができるように、特別な教科道徳と他教科とを関連させた実践を充実させていきたい。

(2) 今後の課題

今年度、交流委員会が中心となり、様々な取組ができた。子供たちは地域の中で積極的に行動できるようになりつつある。授業中での意欲的に地域課題に対して追究する姿も見られる。しかし、授業時間外で自主的に調べたり、地域のために動いたりする姿がまだまだ少ない。地域や家庭に向けて、地域をよくするための自分たちの考えを発信したことで満足してしまう傾向も見られる。伝えるだけでなく、発信後にねらいが達成できたか、発信の活動を振り返る時間も大切にしながら、自分たちで地域のために動く活動に力を入れることができるようにしていきたい。そして、知識だけではなく豊かな学びにつながるように支えていきたい。